

満洲文字の文字表をめぐって(9)

—外国借音用の文字 k' g' h'—

吉池孝一 中村雅之

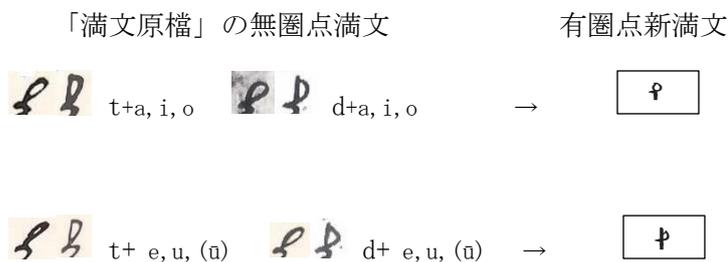
はじめに

中村：今回は「s と ś」「t と d」「c と j と y」の字形について検討しました。

このうち無圏点満文の頭位形の「t と d」から、有圏点新満文の頭位形の「t と d」への変化は興味深いものでした。「満文原檔」の無圏点満文の t と d に相当する文字にはそれぞれ二種類あり、それから発展したとみられるということでした。

吉池：「満文原檔」の無圏点満文にみることのできる二種の t と d は後続する母音とは関係ありません。その機能は同一です。

下に挙げた左側の字は「右に傾いた長丸」で、右側の字は「左縦線と右半円」のように見えます。この無圏点満文の二種の t と d を利用して、有圏点新満文において後続する母音による区別を持った  と  が作られたと想定したわけです。



中村：無圏点満文には上の例のように左縦線が少し突き出たものがあります。しかしこれは意図したものではないでしょう。それに対して、有圏点新満文の  を作るに際して、意図的に左縦線部分を上に突き出させて、一画増加した新字を作った。一画増加して新たな文字を作るというのは、前回までに確認したように、有圏点新満文の新文字作成の方針に沿ったものです。

吉池：「c と j」についても議論しました。有圏点新満文は、「満文原檔」の無圏点満文をだいぶ整理しています。

・無圏点満文



j

ᠵ

ᠵ

 (

ᠵ

) * () は用例が少ない

・有圈点新満文

	頭位形	中位形		
c	<table border="1"><tr><td>ᠴ</td></tr></table>	ᠴ	<table border="1"><tr><td>ᠴ</td></tr></table>	ᠴ
ᠴ				
ᠴ				
j	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ
ᠵ				
ᠵ				

中村：有圈点新満文の c は、頭位形と中位形をすべて \mathcal{C} で表記した。他方、j は \mathcal{C} と \mathcal{J} で表記した。これは c と j を明瞭に書きわけるための処置です。

吉池：j と y についても議論しました。次のようです。

・無圈点満文

	頭位形	中位形			
j	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>ᠵ</td></tr></table> (<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>) * () は用例が少ない	ᠵ	ᠵ
ᠵ					
ᠵ					
ᠵ					
y	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	
ᠵ					
ᠵ					

・有圈点新満文

	頭位形	中位形		
j	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ
ᠵ				
ᠵ				
y	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ	<table border="1"><tr><td>ᠵ</td></tr></table>	ᠵ
ᠵ				
ᠵ				

中村：無圈点満文の \mathcal{C} に、跳ね上がる一画を追加して新文字 \mathcal{C} を作ったとみてよいでしょう。一画増加して新たな文字を作るというのは、有圈点新満文の新文字作成の方針に沿ったものです。

吉池：跳ね上がる一画を追加した文字 \mathcal{C} は、「満文原檔」所収のモンゴル語文の文字や現代モンゴル語文の文字にもあります。現代モンゴル文字の \mathcal{C} について、服部四郎(1946)¹と小沢重男(1997)²は、満洲文字の影響によるものとします。興味深い指摘です。そこで「満文原檔」所収のモンゴル語文における文字 \mathcal{C} の年代的な分布を調べてみました。そこから、満洲文字の影響をみようと試みたわけです。しかし、有圈点新満文の文字作成以前の、早い時期と目されるモンゴル語文書(檔案)に \mathcal{C} が出るため、有圈点新満文の影響の確認は成功しませんでした。今後の課題として残した次第です。

¹ 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂。

² 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林。

中村：前回の概略はこのようなことでした。今回から、外国語の音（主に漢語音）を表記するために作られた諸文字を検討するということでしたね。

外国借音用の諸文字

吉池：有圏点新満文の文字をまとめた文字表により外国借音（主に漢語音）の諸文字をみると次のとおりです³。

子音

翻字と発音	初頭の字形 頭位形	中間の字形 中位形	末尾の字形 末位形	単独の字形 単独形
k[k]	 a, o の上	 a, o の上		
g[g̊]	 a, o の上	 a, o の上		
h[x]	 a, o の上	 a, o の上		
ts[tsʰ]	 a, o の上	 a, o の上		
dz[dz]	 a, o の上	 a, o の上	 *	 *
ž[z]	 a, o の上			
c[tsʰ]	 i の上	 i の上		
j[dz]	 i の上	 i の上		

※c'とjはiの上。この場合iはyと翻字する。したがって「勅」 (ci)はcyと翻字し、「智」 (ji)はjyと翻字する。

母音

[ü] s, ts'の下  s, ts'の下 

※sの下の場合、例えば「四」 はsyと翻字する。ts'の下の場合、例えば「此」 はtsと翻字する。

³ 吉池孝一(2022)「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第235号(2022年6月)1-7頁。

中村：まずは漢語音の [k^h] [k] [x] を表記するために作られたとされる文字 k、g、h を検討しましょう。

文字 k、g、h の二つの字形

吉池：外国借音（主に漢語音）の、[k^h] に相当する音を表記する [◌]k（母音 a, o の上）、[k] に相当する音を表記する [◌]g（母音 a, o の上）、[x] に相当する音を表記する [◌]h（母音 a, o の上）ですね。

池上二郎(1955)⁴によると、外国借音（主に漢語音）の、[k^h] を表記する文字 [◌]k の音は無声有気音 [k^h]（池上氏は [k] とする）、[k] を表記する文字 [◌]g の音は半有声音 [g̚]、[x] を表記する文字 [◌]h の音は軟口蓋摩擦音 [x] です。

中村：満洲語を表記するために、男性子音字 [◌]k [q]（母音 a, o, u の上。厳密には [q^h]）系統の文字と、女性子音字 [◌]k [k]（母音 e, i, u の上。厳密には [k^h]）系統の文字が、既にあります。それ以外に、有圈点新満文の作成者たちは、外国借音（主に漢語音）用に [◌]k [k]（母音 a, o の上）系統の文字を作ったということですね。

上の表では Windows に収められている文字フォント [◌] など外国借音用の文字を表記しています。文字フォントでは分かりにくいので、実際資料によって字形を確認しましょう。

吉池：清・舞格著『滿漢字清文啓蒙』⁵（雍正庚戌(1730)程明遠題）卷之一によると次のとおりです。これは文字の書き順を示した部分です。横に倒して提示します。



中村：Windows のフォントとは形が異なるようです。女性子音字 [◌]k [k] を書く要領で、最初の部分は「×」を描くように交差させています。

「×」を描く字形のほかに、女性子音字 [◌] の上に二本の髭を付けたような字形もあるので紹介します。次にあげるのは『清漢對音字式』（巻頭に乾隆 37 年（1772）の上諭文があり表紙には宣統元年（1909）新鐫とある）にみえる字形です。



⁴ 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社 462 頁-464 頁に掲載された文字表。

⁵ 拓殖大学図書館蔵本の複写を利用。

吉池：たしかに『滿漢字清文啓蒙』の「×」を描くように交差させた字形とはだいぶ異なりますね。

中村：河内良弘(1996)⁶の字母表の解説にも、「×」を描くような字形(57頁の表)と二本の髭を付けたような字形(56頁の表)を挙げてあります。注釈はありませんが、異体字ということなのでしょう。

二本の髭を付けたような字形は、東洋文庫蔵本の『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』の漢字注音にも見られます。もっとも、第一葉の「該當」の「該」に見られるだけで、それ以降はすべて「×」を描く字形ですから、たまたま現れた異体字ということになります。

吉池：『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』は、『滿漢字清文啓蒙』(雍正庚戌(1730)程明遠題)の第二巻「兼滿洲套話」の改訂版です。「兼滿洲套話」は滿洲語と漢語から成っていますが、『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』は漢語の部分に滿洲文字で読みを振っています。落合守和(1989)⁷によると、乾隆26年(1761)の成立とのことですから、『滿漢字清文啓蒙』よりも、“やや”時代がくだる資料ということになりますね。

中村：これまで検討した有圈点新滿文の文字は、無圈点滿文の文字に一画増やして滿洲語用の新文字を作る、ということをして見えています。しかし外国借音用の新文字 k、g、h については、二画増やしています。原則を異にしているということもできそうです。

吉池：滿洲語を表記するための新文字と、外国語(特に漢語)を表記するための新文字とでは、文字作成の方針が異なるのかもしれませんが、新文字作成における増画の原則については、外国借音用の文字をすべて検討してから、再度考えてみましょう。

中村：新文字作成の原則はともかくとして、以上によって、問題となる有圈点新滿文の字形に、少なくとも二種あることはわかります。それで、Windowsの文字フォント⁸と比べるとどのようでしょう。

Windowsの文字フォントと実物資料の字形

吉池：このフォントを拡大すると次のとおりです。明瞭ではありませんが、私には最初の部

⁶ 河内良弘(1996)『滿洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覺羅 烏拉熙春 両氏。

⁷ 落合守和(1989)「翻字翻刻《兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙》(乾隆26年、東洋文庫所蔵)」『言語文化接触に関する研究』第1号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、67-103頁。68頁参照。

分を「×」を描くように“やや”交差させているように見えます。そうであるならば、『滿漢字清文啓蒙』(雍正庚戌(1730)程明遠題)の文字と同じ字形を意図して作成した文字フォントということができそうです。もっとも、これほど大きく拡大しないと交差部分が確認できないとなると、やはり不都合ではあります。



中村: 吉池さんは“やや交差”しているように見えますが、Windowsの文字フォントは「×」を描くような交差を意図して作ったものとは思えません。Windowsの文字フォントは、チベット(西藏)語音と梵語音のgaを表記するガリック文字を、満洲語の表記に流用しただけではないでしょうか。文字フォントの作成者は、『滿漢字清文啓蒙』に見えるような「×」を描くように交差させた文字の作成を放棄したともいえます。次の文字は、前回確認した服部四郎(1946)によるガリック文字の文字表の一部です。

チベット(西藏)語音用

𑖀 ka 𑖀 k'a(kha) 𑖀 ga

梵語音用

𑖀 ka 𑖀 kha 𑖀 ga

吉池: なるほど。𑖀 は、ガリック文字のgaと同じと見てもよさそうです。ガリック文字の字形を流用しただけで、Windowsの文字フォント𑖀 の出だし部分は、「×」のように交差させることを意図したものではないということですね。私には思い込みがあり、事実をみていなかったようです。ガリック文字の字形を流用したとは、考えてもみませんでした。

ただし、今後の議論の便宜のため、文字フォント𑖀 の出だし部分は「×」であると見なして(規範的な字体の代用として)、この文字フォントを利用することにしたいと思います。

中村: Windowsの文字フォントの問題はそれで良いとして、男性子音字𑖀 k [q] (母音 a, o, ūの上)ではなく、女性子音字𑖀 k [k] (母音 e, i, uの上)を基本となる字形(基本字形)として利用して、漢語音を表記する𑖀 を作ったということの意味を確認しておきましょう。

このことは、漢語音の喉音は母音 a, o のまえて口蓋垂音ではなかったことを示しています。モンゴル語や満洲語の子音は母音 a, o の前で口蓋垂音ですが、漢語の子音は母音 a, o の前で口蓋垂音ではなく軟口蓋音であった。そのため、𑖀 k [q] (母音 a, o, ūの上)を使用するわけにはいかなかったということでしょう。

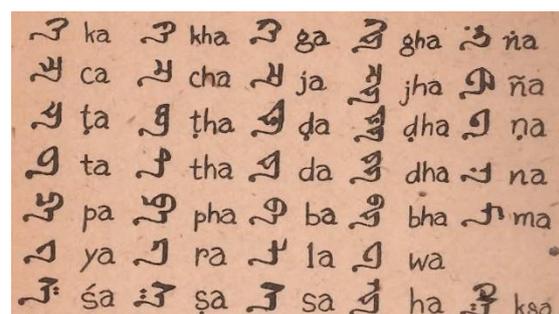
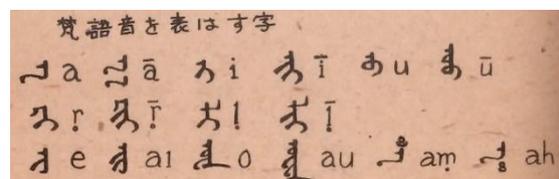
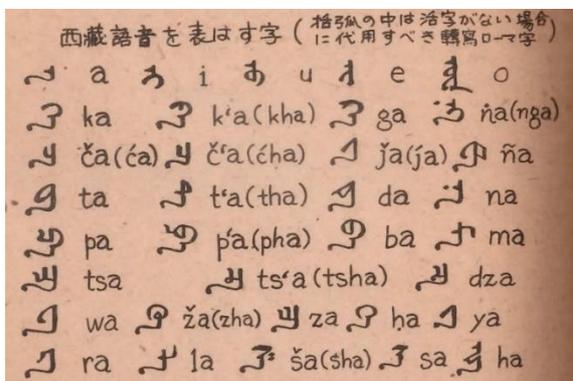
吉池: 問題は、漢語音を表記する新たな文字𑖀 は、独自の創作であるか、それとも何かを参照したかということです。

はしなくも、先ほど、𑖀 k (母音 a, o の上)、𑖀 g (母音 a, o の上)、𑖀 h (母音 a, o の上)

の基本字形⁸について、Windows の文字フォントの作者はガリック文字を流用したとしました。それは両者の字形が似ているとの判断によるものなのでしょう。これは文字フォント自体の話ですが、有圈点新満文の文字を作成するときに、ガリック文字を参照したかどうかについては、改めて確認をしておかなければなりません。

ガリック文字を参照したか

吉池：服部四郎(1946)によると⁸、「蒙古字には、上に説明したものほかに、ガリック (galik) 字と稱して、 經典などで西藏語音や梵語音を表はすため十七世紀の初めに作られた字母がある。次に示すものがそれである。」(22 頁) とあります。同頁に掲載されたチベット語音を表す文字と梵語音を表す文字を引用すると次に挙げるとおりです。



中村：服部四郎(1946)によると、ガリック文字の作成時期は17世紀の初めということですね。これはモンゴル語訳の『大蔵経』の成立時期ということでしょう。デルヒ(2011)⁹によると、モンゴル語『大蔵経』の構成は、『ガンジョール』(γanjuur、律と経)と『ダンジョール』(danjuur、論)からなっており、1602年-1607年に『ガンジョール』の最初のモンゴル語写本が完成し、1628年-1629年にかけて有名な写本金字モンゴル語『ガンジョール』が完成したということです。これらの訳業を通じて蒙古文語が整理され、いわゆるガリック文字も作成されたと考えてよいでしょう。

有圈点新満文の文字の作成が1632年とされるから、時期的にはガリック文字を参照して新文字を作成することは可能です。問題は字形からみて、そのことを証することができるか

⁸ 服部四郎(1946)が提示するガリック文字は字形が明瞭である。しかし、Pope, N. (1954) *Grammar of Written Mongolian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden (本稿は1991年版による) 所収のガリック文字は字形が不明瞭で参考にすることができない。27-28頁。

⁹ デルヒ(2011)「モンゴル語『大蔵経』について」『北海道言語文化研究』9。

ということです。

吉池：ガリック文字の文字表の一部を先ほど中村さんが挙げましたが、再度挙げると下のようになります。たしかに、チベット（西藏）語音用と梵語音用の文字が、有圈点新満文の^ㄹk（母音 a, o の上）、^ㄹg（母音 a, o の上）、^ㄹhi の基本字形となっている^ㄹ（出だしは「×」を描くように交差していると思なす）に類似しているように見えます。

チベット（西藏）語音用

ㄹ ka ㄹ k'a(kha) ㄹ ga

梵語音用

ㄹ ka ㄹ kha ㄹ ga

中村：まずは、チベット（西藏）語音と梵語音を確認しておきましょう。それぞれ左から、無声無気音、無声有気音、有声音を想定しているのでしょうか。モンゴル文字には口蓋垂音を表す男性子音字^ㄹq [χ] (< [qʰ]) の系統の文字と、軟口蓋音を表す女性子音字^ㄹk [kʰ] の系統の文字があるわけですが¹⁰、チベット（西藏）語音用と梵語音用の文字としては、モンゴル文字の軟口蓋音を表す女性子音字^ㄹk の方を基本字形として利用します。女性子音字を基本字形として利用する仕方は、チベット（西藏）語音と梵語音に口蓋垂音が無かったということを表しています。

さて、有圈点新満文の^ㄹ（出だしは「×」であると思なす）ですが、たしかにチベット（西藏）語音用と梵語音用の ga を表記する文字に類似しています。ガリック文字を参照し、部分的に改変を加え、有圈点新満文の基本字形^ㄹを作った、と見て大過はないのでしょうか。

基本字形と調音位置、付加記号と調音様式

吉池：ところで、チベット（西藏）語音と梵語音を表記するガリック文字 ka, kha, ga をみると、調音位置 (place of articulation) が軟口蓋であることを表す^ㄹを基本字形とし、その基本字形^ㄹの下側にほぼ垂直に短い線を付して、調音様式 (manner of articulation) として有気音であることを示しています。ga の場合は、基本字形^ㄹの上側にほぼ水平に短い線を付して有声音（おそらく）であることを示しています。

中村：基本字形に記号を付して、調音様式の異なりを示し、新たな字形を作っているということですね。

吉池：そうなのです。そのガリック文字のこのような仕方は、有圈点満文における喉音の違いを表記する仕方と同じです。

¹⁰ これは『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』（1780年序）などによって知られる18世紀のモンゴル語の音価。13世紀以前のモンゴル語では男性子音 q も女性子音 k も破裂音。男性子音 q は15世紀までには摩擦音化し、女性子音 k も遅れて（19世紀以降）摩擦音化する。

無圈点満文の基本字形である ᠮ (口蓋垂音) と ᠮ (軟口蓋音) に点 (・) を付して無気の半有声音 (おそらく) であることを示す ᠮ と ᠮ を作り、圈 (◦) を付して摩擦音であることを示す ᠮ と ᠮ を作った。外国借音用の文字も同様です。基本字形である ᠮ (軟口蓋音) に点 (・) を付して無声無気の漢語音 [k] を表記するために ᠮ を作り、圈 (◦) を付して摩擦音であることを示す、 ᠮ を作った。

中村：吉池さんは、基本字形に記号を付して調音様式の異なりを示すという有圈点満文の仕方は、ガリック文字の仕方からヒントを得ておこなったと考えるわけですね。

吉池：外国借音用の基本字形 ᠮ についてチベット (西藏) 語音と梵語音を表記するガリック文字 ga を参照した可能性を指摘し得るのならば、ガリック文字の調音様式の異なりを示す方式も参照したと見なしても良いのではないのでしょうか。

中村：そのような可能性も排除しないということならば特段の異論はありません。

ところで、いま話題にしている基本字形 ᠮ には二種の字形の異なりがあるということを確認しましたが、このような異体字の存在のほかに、資料によって用法自体の“ゆれ”があるようなのですが。

資料による用法のゆれ

吉池：用法の“ゆれ”ですか。どういうことでしょうか。

中村：先に外国借音 (主に漢語音) 用の基本字形 ᠮ を、実際の満文資料で確認しました。『満漢字清文啓蒙』(雍正庚戌(1730)程明遠題)によると、女性子音字 ᠮ k [k] (母音 e, i, u の上。[k^h] に相当) を書く要領で、最初の部分は「×」を描くように交差させる字形でした。その他に二本の鬚のような線がある異体字もありました。いずれにしても、新たな基本字形 ᠮ を作り、母音 a, o の上の漢語子音 (他の言語については未確認) を表記した。すなわち、漢語音 [k^h] を表記するための ᠮ k^h、漢語音 [k] を表記するための ᠮ g、漢語音 [x] を表記するための ᠮ h の三種です。これが『満漢字清文啓蒙』に見る規範です。ところが、摩擦音に限っては、漢語表記用の ᠮ h^h を使用せず、そのかわり男性子音字 ᠮ h (母音 a, o, u の上) を使用する場合があります。

吉池：具体的にはどのようなことでしょうか。

中村：手もとにあるパリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」の複写¹¹を眺めると次のとおり

¹¹ 岸田文隆 (1995) 「(資料景印) パリ国民図書館所蔵満漢「千字文」」『富山大学人文学部

です。

- ・ “規範的” な表記 (ᠠ k、ᠠ g、ᠠ h を使用)
破裂音声母の漢字音：可 kó、抗 káng、高 gāo、羔 gāo、過 gó、果 gó、岡 gāng
摩擦音声母の漢字音：海 hǎi、火 hǒ、稟 hǎo (gao の誤か？ 広韻「古老切」)
- ・ “規範的” でない表記 (ᠠ h を使用)
摩擦音声母の漢字音：号 hao、韓 han、寒 han、皇 howang、禍 ho、何 ho、毀 hūi、

吉池：これは興味深いですね。

中村：網羅的な調査ではなく、資料をザッと眺めたものですが、一定の傾向は見て取ることができます。「摩擦音声母の漢字音」の表記には、“規範的” な（厳密には『滿漢字清文啓蒙』の表記) ᠠ h を使用するもの（海 hǎi と火 hǒ など）もありますが、多くは ᠠ h を使用します。摩擦音声母のみ、規範的な表記から外れて、基本字形 ᠠ の使用がみられるのは、何らかの意味があると考えざるを得ません。

吉池：基本字形 ᠠ は満洲語の口蓋垂音 k[q] g[g] h[h] ([h]は文字表の表記であるが口蓋垂摩擦音であるならば[χ]が適当) を表記するための文字なので、満漢「千字文」の作成に関わった満洲人は、男性母音 a, o が後続する「摩擦音声母の漢字音」を、軟口蓋音よりも口蓋垂音に近いと判断し、このような表記とした可能性はあります。

中村：そう思います。

吉池：このような表記は、パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」に特有なものでしょうか。

中村：それ以外にもいくつかの資料があります。私の印象では、摩擦音に漢語用の特殊文字ではなく満洲語の男性子音と同じ ᠠ h を用いるのは、例外というよりむしろ通例と言ってよいのではないかと考えています。

吉池：母音 a, o の漢語の喉音を ᠠ h で表記するというのは、『滿漢字清文啓蒙』(雍正庚戌(1730)程明遠題)のもので、一応これを“規範” であるとして文字表を作るのがふつうですが、この“規範” から“一定の外れ方をする” 資料が複数あり、もしも“通例” とすることができるならば、有圈点新満文の文字表を書き変えなければならないかもしれない大きな問題です。

中村：文字表を書き変えるといいますと。

吉池：いくつかの書き換え方が考えられます。そのうちの一つは次のようなものです。

翻字と発音	頭位形	中位形
k[k̟]	ʔ a, o の上	ʔ̟ a, o の上
g[g̟]	ʔ̟ a, o の上	ʔ̟ a, o の上
h[x]又はh [χ]	ʔ̟ 又は ʔ̟ a, o の上	ʔ̟ 又は ʔ̟ a, o の上

なお、この文字表¹²は、池上二郎(1955)にある文字表の文字を Windows のフォントに置き代えて作ったものです。中位形の ʔ̟ 、 ʔ̟ 、 ʔ̟ ですが、池上二郎(1955)をそのまま採用しました。実例に当たって確認したわけではありませんので、不備といえませんが、しばらくはこのままとします。しかし、いま話題となっている ʔ̟ に相当する中位の字形については、確認をする必要があるので、とりあえず「？」を付しました。

中村：漢語表記においては1音節ごとに分かち書きをするのが通例なので、実際には中位形はほぼ用いられません。漢語由来の満洲語には用いる可能性があります、それを漢語表記とするかどうかは見解が分かれそうです。いずれにしても摩擦音については、もう少し事例を集める必要があります。

吉池：外国借音（主に漢語音）用の ʔ̟ の用法には、まだいろいろと確認すべき事がありそうですね。どうでしょう中村さん、別に稿を起してこの問題について論じていただけませんか。

この問題、われわれの議論としては未消化ですが、 $\text{ʔ̟}k$ 、 $\text{ʔ̟}g$ 、 $\text{ʔ̟}h$ についてはこの辺りで切り上げ、次に進みましょう。

中村： $\text{ʔ̟}h$ の用法について稿を起すかどうかについては検討します。

今回はこれまでとして、次回は、外国借音用の文字の続き、 ts'/dz 、 $ʒ$ 、 $c'y/jy$ 、母音 y について検討するということですね。

¹² 注3の吉池孝一(2022)の文字表。